福岡女学院大学紀要　人文学部編　第31号
２０２１年３月

聖地に向けられる消費のまなざし

―「平戸の聖地と集落」を事例に―

池　田　拓　朗

聖地に向けられる消費のまなざし

―「平戸の聖地と集落」を事例に―

池　田　拓　朗

1．はじめに

2018年７月，日本に22件目の世界遺産が誕生した。バーレーンで開催された第42回 UNESCO 世界遺産委員会において，「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産（Hidden Christian Sites in the Nagasaki Region）」（以下，潜伏キリシタン関連遺産）を世界文化遺産に登録することが決定したのである。世界遺産登録の動きが始まった2001年以来，苦節17年を経て世界遺産への登録が実現し，構成資産の地域では各地で歓喜の声が上がった。権力の弾圧に屈することなく，厳しい弾圧に耐えながらも自分たちの信仰を守り続けてきた「潜伏キリシタン」の歴史が，「人類の宝」として認められた瞬間であった。

しかしながら，世界遺産登録はあくまで通過点である。潜伏キリシタン関連遺産の世界遺産登録をめぐっては，当初から宗教的聖地である教会の観光資源化に関してさまざまな議論が交わされてきた[1]。すなわち，世界遺産としての価値を帯びた「地域の宝」を守りながら，いかに観光との調和を図っていくかが問われ続けてきたのである。

そこで本稿では，潜伏キリシタン関連遺産の構成資産の１つである「平戸

[1] 池田拓朗（2017）：「観光商品としての「教会」－長崎県五島列島を事例として－」『観光学論集』第12巻，pp. 1 -12

の聖地と集落（春日集落と安満岳）」と，世界遺産登録のプロセスのなかで構成資産の候補から除外された「田平天主堂」の２つの資産を事例に，世界遺産登録後の地域の変化を検討しながら，その課題と持続可能な観光のあり方を考察することを目的とする。

２．世界遺産登録までのプロセス

潜伏キリシタン関連遺産が世界遺産に登録されるまでにはさまざまな困難があり，周知の通り当初は「長崎の教会群とキリスト教関連遺産（Churches and Christian Sites in Nagasaki）」（以下，長崎の教会群）とその名前も異なるものであった。ここでまず，潜伏キリシタン関連遺産の世界遺産登録までのプロセスについて概観しておきたい。

長崎の教会群の世界遺産化の動きは，2001年９月15日に結成された「長崎の教会群を世界遺産にする会」の活動がその契機となっている。有志で結成された同会は，長崎のカトリック教会群の意味とその背景にある歴史・文化とともに広く世間に知らしめ，過疎化や高齢化などで地域住民だけでは維持が困難状況になってきている教会を永く保存していくことを目標として掲げていた（木村 2007）[2]。ちょうど同時期，長崎県も県の特色である歴史テーマを観光振興につなげる取り組みとして実施した「ながさき歴史発見・創出プロジェクト」のなかで，長崎県のカトリック教会群を観光資源として捉えなおす動きが顕著になってきていた。それらの動きのなかで長崎の教会群の再評価がなされ，個々の教会が“教会群”として注目を集めるようになったのである。

そして2007年１月に文化庁の世界文化遺産暫定一覧表に掲載された。松井

[2] 木村勝彦（2007）：「長崎におけるカトリック教会巡礼とツーリズム」『長崎国際大学論叢』第７号，pp. 123-133
なお同会のパンフレットには，世界遺産登録を目指す諸活動を行うために教会関係者，学術研究者，地元企業，マスメディア，行政関係者などの多様な有志が自主的に結成されたことが述べられている。

（2013）が指摘しているが，このとき文化庁が世界遺産候補として評価した点は，長崎の教会群の世界史に類を見ない歴史性，日本のキリスト教がたどった数奇な歴史の物語性，西洋と東洋の文化が融合した建造物としての価値であり，これらがUNESCOの定める「世界遺産条約履行のための作業方針」で示された顕著な普遍的価値を証明する評価基準のⅱ，ⅲ，ⅵに該当すると評価し，それらを証明する物証として20の資産が選定された[3]。その後，度重なる議論が重ねられていく過程で構成資産の見直しや法的保護の観点から資産の選定が行われ，最終的に14の構成資産が決定した。それらの取り組みの結果，2014年9月に日本政府が2016年の世界文化遺産登録候補として長崎の教会群を推薦することを決定し，翌2015年1月には正式な推薦書がUNESCO世界遺産センター提出された。そして同年9月にはUNESCOのICOMOS（国際記念物遺跡会議）による現地調査が行われ，登録の可否を待つ段階にあった。

しかしながら，ICOMOSが2016年2月に示した中間報告は世界遺産登録に期待していた関係者にとって衝撃の内容であった。中間報告のなかで指摘されていたのは，長崎の教会群には潜在的に世界遺産としての価値があることを認めつつも，世界的な独自性を十分に証明できておらず，2世紀以上に及んだ禁教期にキリシタンが潜伏して迫害に耐えたところにこそ独自性があり，そこに焦点を当てた推薦書に見直すべきであるという見解であった。さらに，地域参加による資産の管理システム，危機管理，将来的な来訪者管理の課題も併せて指摘されたのである[4]。これを受けて長崎の教会群は推薦を一時取り下げ，ICOMOSとアドバイザリー契約を結び助言を得ながら推薦書の見直しを図ることとなったのである。

もともと長崎の教会群の世界遺産化は「生きた教会」として，ありのまま

---

[3] 松井圭介（2013）：『観光戦略としての宗教－長崎の教会群と場所の商品化』筑波大学出版会，pp. 109-115

[4] ICOMOSの関心は「地域の関与の度合い」にあり，多くの来訪者への対応方法や災害時の資産の保護のありかた，そして観光客の増加によってもたらされた収益の活用方法等の意思決定や管理保存の全般で地域が1つにまとまることを要求した。

の姿の内に再発見し，その価値を失わせないようにすることがその狙いとされてきた（木村 2007）[5]。そのため厳しい弾圧のなかで潜伏を余儀なくされたキリシタンの子孫がカトリックに復帰し，山間部や島々の入江といった先祖が潜伏してきた集落に建立された教会が，250年にも及ぶ潜伏から復帰のプロセスの象徴するものであるという物語が展開されてきたのである[6]。しかし，禁教期に焦点を当てたことで，「長崎地方の潜伏キリシタンが禁教期に密かに信仰を続けるなかで育んだ，宗教に関する独自の文化的伝統を物語る顕著な物証」という価値へと転換し，禁教期との関連が薄いと判断された「田平天主堂」と「日野江城跡」の資産除外が決定されたのであった[7]。またそれ以外の資産も，従来の「城跡」「教会」といった区分を廃止し，教会

写真 1　世界遺産登録の瞬間（平戸市）
（2018年 6 月30日筆者撮影）

---

[5] 前掲書，pp. 128

[6] 従来の推薦書は「日本におけるキリスト教の伝播と繁栄，弾圧と250年もの長期にわたる潜伏，そして奇跡の復活というプロセスを示す顕著な物証」として世界遺産の価値を表していた。

[7] 2016年 5 月30日長崎新聞22面「教会群「日野江城跡」「田平天主堂」除外」。
なお平戸市長黒田成彦は「教会中心のストーリを否定されたのであれば，初動に問題があったのではないか。振り回されたわけだから総括してほしい」と述べ，これまでの世界遺産運動の展開に苦言を呈した。

写真２　世界遺産登録を祝う横断幕
（2018年11月５日筆者撮影）

を含む集落に各構成資産が再編され，名称に「潜伏キリシタン」を用いてその価値を端的に示すべきとの指摘を受け，潜伏キリシタン関連遺産に変更したのであった。ICOMOS の助言をもとに作成された新たな潜伏キリシタン関連遺産の推薦書は，2018年５月４日に世界遺産一覧表に「記載（Inscription）」すべきとの ICOMOS の勧告を受け，６月30日には第42回世界遺産委員会において満場一致で「世界文化遺産」に登録されることとなり，県内の各地で喜びの声があがった。2001年の世界遺産運動が始まって以来，さまざまな困難がありながらもようやく世界遺産登録への取り組みが結実したのであった。

それでは本稿で取り上げる潜伏キリシタン関連遺産のうち「平戸の聖地と集落」はなぜ構成資産に選定されたのか，次章ではその歴史と価値を概観していきたい。

３．春日集落の歴史

平戸は長崎で初めてキリスト教が伝来し，長崎がキリシタンの街として成

立する礎を築いた都市である。1550年に平戸に長崎で初めてポルトガル船が来航し，フランシスコ・ザビエルは海外との貿易に興味を示していた領主松浦隆信に歓迎され，隆信の許可を得て家臣の木村氏の住居に住みながら布教活動に取り組んだと言われている。わずか１ヶ月の間に100人ほどの人々が洗礼を受けたとされており，平戸からキリスト教の布教が始まっていくのである（長崎巡礼協議会 2012）[8]。隆信はキリスト教に好意的な態度を示す一方で，貿易の利潤が目的であったこともあり自らがキリスト教に入信することはせず，その代わりに家臣の籠手田安経，一部勘解由兄弟を入信させたのである。以後，この籠手田・一部の両氏は平戸地方のキリシタンの庇護者となっていくのであった[9]。

しかしながら，1597年の日本二十六聖人殉教を契機として，長崎全土でキリシタンの弾圧が本格化していく。相次ぐ迫害によって殉教や領内から逃亡，転宗を余儀なくされた平戸のキリシタンたちのなかには壊滅的な状況に陥る場所もあった。特に1599年，平戸のキリシタンにとって決定的な出来事が起こる。貿易の利潤に着目し積極的な弾圧を実行しなかった松浦隆信が亡くなり，家督を継いだ鎮信（法印）は，領内の宣教師追放を命じるとともに，父親の仏式の葬儀に籠手田・一部両氏の出席を要求するという事実上の棄教を迫った。さらに鎮信は平戸領の全キリシタンを棄教させ，従わない者の追放・弾圧を指示するなど，一転して弾圧政策を推進したのである。しかし，両氏とも棄教することはせず，キリシタンの領民600名とともに平戸を脱出し，長崎に亡命する道を選んだのであった。領主がいなくなった彼らの領地は松浦氏の直轄領となり，各地でキリシタンの取り締まりが本格化していくのである[10]。キリスト教が禁止されたことで，平戸のキリシタンたちは仏教や神

---

[8] 長崎巡礼協議会（2012）：『NAGASAKI　TRAIL 長崎県の教会堂と巡礼地－平戸・佐世保編－』長崎巡礼協議会，pp. 16-29

[9] 籠手田氏は生月の館，度島，平戸の獅子，春日，飯良，白石を領地として治めていた。また一部氏も生月の一部，平戸の根獅子を領地として治めており，平戸地方のカクレキリシタンのほとんどがこの２人の領民の子孫であるとされている。

[10] 長崎では1613年に禁教令が発布され，翌1614年から弾圧が本格化していくが，平戸はそれに先駆けて早い段階から弾圧が始まっていた。

道を受け入れながら密かに信仰を継承していくこととなった。

平戸島西岸地区に位置する春日集落は籠手田氏の領土であり，領主とともに住民がキリスト教に一斉改宗した日本における初期のキリスト教の地であり，広い地域で一斉改宗がおこなわれたのは，籠手田領の改宗が最古の事例

写真 3　春日集落の棚田
（2018年 7 月29日筆者撮影）

写真 4　丸尾山山頂の祠
（2018年 6 月 6 日筆者撮影）

だとされている。当時の春日集落には「海も陸にも見晴らしが良く，風通しの良い，信仰深い土地」に教会があったことが，宣教師の手紙から読み取ることができる。現在のところこの教会が建立されていた明確な場所はわかっていないが，その場所には十字架が建てられていたとされており，この十字架の建立地として考えられているのが春日集落の中心部に位置する「丸尾山」である。丸尾山は棚田を見渡せる好適地にありながら，その周辺には度重なる発掘調査によってキリシタン時代のものと思わせる長方形の土坑が発見されており，その頂上には祠が祀られ集落の聖地として崇拝されてきた。

しかし，春日集落の領主であった籠手田氏が長崎に亡命すると，丸尾山の十字架は破壊され，春日集落の人々もまた厳しい弾圧のなかで潜伏を余儀なくされるのであった。そこで彼らが信仰の対象としたのが，古くから平戸一帯の山岳信仰の中心であり，平戸鎮護の霊山として崇敬を集めていた丸尾山の背後にそびえる「安満岳」である（後藤 2018）[11]。この安満岳は山全体を御神体としており，山頂には718年に建立された白山比賣神社が鎮座している。春日集落のキリシタンたちは神社の拝殿の裏に存在する石祠を密かに「安満岳の奥の院様」として拝所とし，キリシタンの神様を祀る霊地として崇めてきたのである。他にも潜伏を余儀なくされたキリシタンたちは，先祖の殉教地であり聖水を採取する最高の聖地「中江ノ島」や，家屋内に祀られた納戸神，お神様（お札）やおまぶり，お払いの道具であるオテンペンシャなどを信仰の対象とし，地縁血縁的組織内のみで口承伝承された「オラショ（祈り）」を唱えながら，密かに信仰を守り続けたのであった。

そして明治に入り，1873年にキリシタンの禁制の高札が撤廃され，キリスト教の信仰が容認されるようになった。それでも春日集落の人々はカトリックに復帰する道を選ばず，潜伏期からの独自の信仰形態を保持し続けたのである[12]。春日集落のカクレキリシタンは，「講」と呼ばれる信者の組織を形成

[11] 後藤真樹（2018）：『かくれキリシタン－長崎・五島・平戸・天草をめぐる旅―』新潮社，pp70-85

[12] キリスト教の信仰が認められるようになった後も，カトリックに復帰せず，潜伏時の信仰形態を堅持した人々のことを「カクレキリシタン」と呼ぶ。

写真 5　安満岳の石祠
（2018年 6 月 9 日筆者撮影）

し，今日に至るまで先祖代々の教えを守り抜いてきた。カクレキリシタンが長きにわたって教えを守り続けることができた要因はいくつか存在するが，宮崎（2018）によれば，カクレキリシタンの信仰は「父祖伝来のありがたい宗教」であり，「先祖が大切にしてきた教えを絶やすことなく守り続けることが子孫としての務め」という信念があったことが，１つの要因として挙げられている[13]。

現在の春日集落では組織的なカクレキリシタンの信仰は消滅しているが，今回世界遺産に登録された場所は，キリシタン信仰に由来する御神体が大切に守られ，禁教時代に並行して信仰されてきた集落であり，現在に残る棚田は16世紀当時とほとんど変わらない春日の人々が息づく景観美を今もなお継承していることが評価されたのである[14]。

[13] 宮崎賢太郎（2018）：『潜伏キリシタンは何を信じていたのか』角川書店，pp. 195-212
[14] 広野（2018）によれば，2014年に作成された長崎の教会群のパンフレットには「潜伏キリシタンの子孫の多くは禁教政策が撤廃されてからも独自の信仰習俗を継承しき，その伝統は＜かくれキリシタン＞によって今もなお大切に守られている」と説明されている。一方で，2017年に作成された潜伏キリシタン関連遺産のパンフレットには，「解禁後はカトリックに復帰することはなく，禁教期以来の信仰形態を維持し続けたが，現在ではほぼ消滅している」と，カクレキリシタンへの言及は正反対になっている。

一方で，平戸にはキリスト教の信仰が認められるようになった後，カトリックに復帰した人々も存在する。復活の時期ははっきりしないものの，明治初期にパリ外国宣教会の神父らによる巡回や，外海地方からの移住者などによって信仰の復活がみられ，1886年の紐差教会の建立を皮切りに平戸にも教会が建てられるのであった。そこで1918年に建立されたのが田平天主堂である。田平天主堂は長崎の教会建築の第一人者である鉄川与助によって設計・施工された最後の煉瓦造りの教会で，その完成度は鉄川の建築物のなかでも名作との呼び声も高い。日本二十六聖殉教者の列聖50年を記念して建設が開始された本教会は，2003年に国指定文化財の指定を受けており，長崎の教会群が世界遺産登録を目指した当初から有力な構成資産の１つに挙げられていたものの，ICOMOS の中間報告の指摘を受け，やむなく世界遺産登録への道を諦めざるを得なくなったのである。

ここまで平戸のキリスト教の歴史を概観してきた。長崎で初めてキリスト教の布教が行われた平戸は，その当時の信仰の記憶を今なお残す聖地が多数残る場所として，潜伏キリシタン関連遺産の構成資産の１つとなっている。それでは世界文化遺産に登録された2018年７月以降，春日集落にはどのような変化がもたらされたのであろうか。次節では世界遺産登録後の地域にどのような変化がもたらされたのか，観光統計や筆者が実施したアンケート及び聞き取り調査の結果から考察していきたい。

４．世界遺産登録後の地域の変化

2018年９月に行われた長崎県定例議会では，世界遺産登録後，潜伏キリシタン関連遺産の資産への訪問者は大幅に増加しており，７～８月の各構成資産への来訪者は122,376人と前年同時期より約35,000人の増加を記録したと明らかにした[15]。なかでも最も伸び率が高かったのが，前年同時期の約10倍

[15] 長崎新聞社（2018）：『長崎新聞』2018年９月37日22面「７，８月来場者12万人」

表１　長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産の来訪者数

	（登録前年） 2017. 7～2018. 6①	（登録１年目） 2018. 7～2019. 6②	（登録２年目） 2019. 7～2020. 6③	登録前後比 （②／①） 〔登録１年目／ 登録前年〕	登録後比 （③／②） 〔登録２年目／ 登録１年目〕
大浦天主堂	400, 869	505, 773	273, 294	126%	54%
外海の出津集落 （出津教会堂）	27, 833	63, 986	24, 481	230%	38%
外海の大野集落 （大野教会堂）	4, 582	18, 346	10, 082	400%	55%
黒島の集落 （黒島天主堂）	4, 607	6, 085	2, 121	132%	35%
平戸の聖地と集落 （春日集落）	3, 416	23, 005	16, 130	673%	70%
原城跡	17, 721	49, 781	29, 281	281%	59%
久賀島の集落 （旧五輪教会堂）	7, 576	22, 168	11, 258	293%	51%
江上集落 （江上天主堂）	6, 931	18, 077	8, 836	261%	49%
頭ヶ島の集落 （頭ヶ島天主堂）	36, 336	47, 361	25, 552	130%	54%
野崎島の集落跡 （旧野首教会）	3, 593	5, 167	2, 787	144%	54%
天草の崎津集落 （崎津教会堂）	91, 554	177, 016	106, 676	193%	60%
田平天主堂	74, 418	105, 778	72, 565	142%	69%

資料：長崎県観光振興課「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産の来訪者数」より筆者作成

に当たる3, 330人の観光客が訪れた「平戸の聖地集落（春日集落と安満岳）」であった[16]。また年間の来訪者数を見ると，登録１年目（2018年７月～2019年６月）の来訪者数は23, 005人と前年比673％増加という他の資産のなかでも爆発的な増加を記録している（表１）。

春日集落は1988年に20世帯103人が生活をしていたが，2018年には19世帯65人にまで減少し，これまで平戸のキリスト教の歴史に精通した人々を除き，観光客が訪れることはほとんどない土地であった。春日集落に来訪する観光

[16] その他の資産の来場者数の一例としては，大浦天主堂が83, 990人（前年1. 21倍），原城跡が7, 958人（前年4. 53倍），外海の出津集落が7, 990人（前年2. 27倍），頭ヶ島の集落が8, 472人（前年1. 11倍）と，すべての資産が増加した。

写真 6　春日集落拠点施設かたりな資料室
（2018年 5 月 4 日筆者撮影）

写真 7　春日集落拠点施設かたりな隠居部屋
（2019年 8 月26日筆者撮影）

客が増加した要因は，世界遺産候補として地域の歴史や文化を伝える観光施設として春日集落の古民家を改装して作られた「春日集落拠点施設かたりな」（以下，かたりな）の存在が大きい。同施設は母屋と隠居部屋の２つに分かれており，前者は案内所や売店，春日集落で信仰されていた信仰具を展

示する資料室があり，隠居部屋には集落の住民が語り部として常駐し，手作りの漬物などのおもてなしを受けることができる。訪れた多くの観光客は資料室で平戸のキリスト教及び春日集落の歴史についての映像を視聴し，案内所に常駐する地域住民の解説を聞き，隠居部屋でおもてなしを受けて春日集落を後にするという行程が一般的である。松井（2018）も指摘しているが，潜伏キリシタン関連遺産は観光客にとって難易度が高く，観光資源化が容易ではない資産である[17]。すなわち，本資産が禁教期の隠された信仰形態ゆえに資料も少ないだけでなく，相当な知識や関心がなければ潜伏キリシタン関連遺産の本質を理解することは難しいため，観光客にこの場所で起きた歴史をいかに可視化させるかという難しさを内包しているからだ。実際にかたりなでガイドを務めるＴ氏は，集落の歴史を短時間で伝えることの難しさを語っており，「本来はかたりなを訪れた後，世界遺産に登録されている棚田の見学を勧めているが，すべての観光客がその通りの行動をとるわけではないため，多様な観光客への対応には限界がある」ことを話していた。特に春日集落は単に棚田の景観美を見るだけでは資産の価値を理解することは難しく，住民の語りは春日集落の観光にとって非常に重要な意味をもつが，そこにはさまざまな葛藤があることが筆者の聞き取り調査のなかでも明らかとなっている。一方で，筆者が平戸市を訪れる観光客1,001名を対象に実施したアンケート調査では，かたりなを訪れた人々の満足度の高さを伺い知ることができる[18]。かたりなを訪れた観光客からは，「春日集落の案内所の方が親切でお忙しいにも関わらずとても感じが良かった」「春日集落についてご講話やVTRの質がとても高く，見聞できてとてもよかった」といった声が多数寄せられており，来訪者からも一定の評価を受けていることが明らかとなった。

---

[17] 松井圭介（2018）：「潜伏キリシタンは何を語るか－「長崎の教会群」をめぐる世界遺産登録とツーリズム－」『地理空間』Vol. 11- 3，pp. 253-267

[18] 2018年７月～2019年３月の期間に平戸市を訪れる10代～90代の男女1,001名の観光客に満足度調査を実施した。調査方法は市内の観光案内所及びかたりなにアンケートを常設し，その他の平戸市の主要な観光地では聞き取り調査も行った。

春日集落を訪れる観光客の満足度が高い要因として考えられるのは，春日集落は平戸北西の奥まった場所に所在することから集落に向かう道程は道幅が狭く，離合が困難であることから中型バス以上の自動車は乗り入れができず，公共交通機関での移動もまた難しい。そのため世界遺産登録後観光客は増加しているものの，一度に大量の訪問者がくる場合は数少なく，来訪者もある程度潜伏キリシタンへの関心を持った人が多い傾向にあることから，観光客のマナーの問題はほとんど見られておらず，地域住民も許容範囲内の来訪者数に対峙する場面が多いことから観光客に否定的な意見を抱く住民は比較的少ない[19]。

一方で，世界遺産候補から除外された「田平天主堂」も，潜伏キリシタン関連遺産の世界遺産登録が多方面に影響を与えている。田平天主堂もまた，潜伏キリシタン関連遺産の世界遺産登録後，観光客が激増し，他の構成資産と比べても多くの観光客が来訪している。筆者は2016年から田平天主堂への教会関係者に対する聞き取り調査を実施してきたが，その頃から関係者は世界遺産化とそれに伴う観光資源化の現状に他の構成資産の教会とは違う反応を示していた。平戸市は平戸観光協会が主体となって「キリシタン紀行」と題する教会巡礼ツアーをいち早く実現させていたが，その拠点となっていたのが田平天主堂である。当初から多くの観光客が来訪していたが，世界遺産運動が加速していくなかでその価値が発信されていくことに好意的な意見を示す一方で，「教会は信仰の場であって見世物ではない」という主張を信徒代表のＹ氏は繰り返し強調してきたのである[20]。増加する観光客に対応するため田平天主堂では，他の構成資産と同様に事前連絡制の導入と教会守の配置によって観光客の訪問に対応してきたが，それでも年々問題行動が深刻化しており，マナーの啓発の不徹底が指摘されてきた[21]。2018年に教会守に行っ

---

[19] 一方，世界遺産に登録されている棚田は約15ヘクタールの水田を，約18軒の住民たちが手分けして現在維持している。地域の過疎化は進む一方，常にその景観を保つためには日々の住民の負担が増大しており，危機感を募らせている。

[20] 西日本新聞社（2016）：『西日本新聞』2016年２月10日23面「取り下げの波紋－教会群の世界遺産推薦上」

た聞き取り調査では，田平天主堂でも観光客の増加によって「教会守の声かけに対するクレーム」「教会行事の最中にも関わらず無断で教会内を見学」「禁止されている堂内の写真撮影」などのトラブルが多く見られるようになったことが語られた。

さらに「教会守」は通常，構成資産が所在する各自治体が信者を雇用して観光客のマナー啓発及び管理を実施するものであるが，この教会守をめぐって新たな問題が発生している。現在田平天主堂の教会守は平戸観光協会が雇用する形態がとられているが，観光協会は「教会は観光施設である」との認識を示し，教会を「祈りの場」として守るために尽力している教会守は観光地として複雑な思いを抱いている。さらに一時は教会守を地域で配置し，行政・観光協会が関与しないという案まで浮上していたという。その場合，田平天主堂は観光客の受け入れを拒否すべきとの意見も信者から見られており，世界遺産登録を契機に観光客は増加する一方で，許容範囲を越える来訪者によってマナーの問題がより深刻化し，自分たちの信仰の場を守るための信者の負担がより多くなっていることにディレンマを抱えていた。

世界遺産の登録に際し，UNESCO は各構成資産の物理的・社会的状況に基づく制約を十分考慮した上で，「収容力（carrying capacity）」及び望ましい観光の管理についての検討を追加勧告として提示している。藤木（2010）が指摘しているが，世界遺産観光を宣伝するパンフレットやガイドでは世界遺産が本来の意味からかけ離れ，「観光商品」として扱われる傾向にある[22]。確かに世界遺産登録された場所のほとんどが，地域活性化の起爆剤として観光と結びつく事例が国内外でみられている。しかしながら，世界遺産は遺産を保護・管理し，次世代に伝えていくことが本来の目的である。潜伏キリシタン関連遺産は潜伏期という独自性のもとそれらの価値を証明するために必

[21] かつて教会の聖水盤にタバコが押し付けられたり，堂内での飲食などが問題になっていたが，2016年時点でも教会に通じる道に痰やツバを吐いたり，案内所の立ち寄りの無視，駐車場の石垣への立小便などの問題がさらに起こっていた。

[22] 藤木庸介（2010）:「本書の意義とリビングヘリテージ」藤木庸介編『生きている文化遺産と観光－住民によるリビングヘリテージの継承』学芸出版会，pp. 9 -17

要な12資産が選ばれたわけだが，長崎のキリスト教の歴史は構成資産に含まれていなくとも重要な意味をもつ資産が県内の各地に多数存在している。したがって観光客は潜伏キリシタン関連遺産に「世界遺産」というフィルターを通してまなざしを向けるだけでなく，その背後にある歴史や文化，そして地域そのものを理解する必要があるのである。なぜならば，長崎の教会群の世界遺産化の原点は生きた教会として現在も信仰の拠り所である教会を守ることにあるからだ。現在，潜伏キリシタン関連遺産の遺産としての価値や意義を解釈して語ることのできる住民やガイドや少なく，また構成資産のほとんどの地域が過疎化・高齢化の現状にある。地域の宝を世界遺産として維持していくためには，住民の理解は不可欠であり信仰の場と観光の維持にはまだまだ課題が山積している。

5．おわりに

本稿では，潜伏キリシタン関連遺産の構成資産の１つである「平戸の聖地と集落（春日集落と安満岳）」と，世界遺産登録のプロセスのなかで構成資産の候補から除外された「田平天主堂」の２つの資産を事例に，世界遺産登録後の地域の変化を検討しながら，その課題と持続可能な観光のあり方を考察してきた。潜伏キリシタン関連遺産の世界遺産運動が始まった2001年以来，苦節17年を経て悲願の世界遺産登録が実現し，県内外で登録の喜びを分かち合った。一方で重要な点は世界遺産に登録されたことに加え，長崎にキリスト教が伝来し，250年もの間，潜伏し続けた信者がいた事実であり，潜伏し続けた信者の子孫たちが教会を建立したり，独特の信仰形態を継承してきた「伝統文化」が守り続けられてきたことが世界遺産登録によって広く周知された点である。コロナ禍にある現在，構成資産の各教会や施設では一時的に来場者の入場を中止あるいは制限を設けており，来訪者数も大幅に減少している。来訪者が限定されている今だからこそ，ただ観光客の来訪を促進させるだけでなく，世界の宝となった遺産の価値を「物語（ストーリー）」とし

て創出し，“適正なマネジメント”を行うことが最優先の課題といえよう。

参考文献

池田拓朗（2017）：「観光商品としての「教会」－長崎県五島列島を事例として－」『観光学論集』第12巻，pp. 1 -12

木村勝彦(2007)：「長崎におけるカトリック教会巡礼とツーリズム」『長崎国際大学論叢』第７号，pp. 123-133

後藤真樹（2018）：『かくれキリシタン－長崎・五島・平戸・天草をめぐる旅－』新潮社，pp70-85

長崎巡礼協議会（2012）：『NAGASAKI　TRAIL 長崎県の教会堂と巡礼地－平戸・佐世保編－』長崎巡礼協議会，pp. 16-29

長崎新聞社（2016）：『長崎新聞』2016年５月30日22面「教会群「日野江城跡」「田平天主堂」除外」

長崎新聞社（2018）：『長崎新聞』2018年９月37日22面「７，８月来場者12万人」

西日本新聞社（2016）：『西日本新聞』2016年２月10日23面「取り下げの波紋－教会群の世界遺産推薦上」

広野真嗣（2018）：『消された信仰－「最後のかくれキリシタン」―長崎・生月島の人々－』小学館

藤木庸介（2010）：「本書の意義とリビングヘリテージ」藤木庸介編『生きている文化遺産と観光－住民によるリビングヘリテージの継承』学芸出版会，pp. 9 -17

松井圭介（2013）：『観光戦略としての宗教－長崎の教会群と場所の商品化』筑波大学出版会，pp. 109-115

松井圭介（2018）：「潜伏キリシタンは何を語るか－「長崎の教会群」をめぐる世界遺産登録とツーリズム－」『地理空間』Vol. 11- 3，pp. 253-267

宮崎賢太郎（2018）：『潜伏キリシタンは何を信じていたのか』角川書店